

特集論文 I

学校図書館を活用した 「主体的・対話的で深い学び」のある国語科の単元づくり

—若年教員の挑戦をどうサポートしていくのかの視点に立って—

Making a unit of Japanese language department utilizing school library
with “in-depth study by subjective and interactive learning”

— Through the viewpoint of how to support young teacher's challenge —

須佐 宏

SUSA Hiroshi

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

米田 優介

YONEDA Yusuke

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

玉置 大己

TAMAKI Hiroki

(和歌山市立四箇郷小学校)

小原 佑真

OHARA Yuma

(和歌山市立四箇郷小学校)

受理日 平成 31 年 1 月 21 日

抄録：新規採用から 3 年目の若年教員が初めて自力で国語科の単元づくりに挑戦した。学年主任教員や教職大学院の学校改善マネジメントコースで学ぶ現職院生が、単元づくりや教材研究について、どこまで授業者本人に任せるのか、どのタイミングで、どの程度の支援が必要なのかを見極めながらの授業実践となった。実践は、単元を通して児童が意欲的に学べる学習となったが、若年教員への適切な支援の在り方についての課題も明らかとなった。

キーワード：『森へ』、国語科の単元づくり、学校図書館、研究授業、校内研修、若年教員のサポート

1. はじめに

近年、小学校現場を訪問すれば学ぶ意欲をもった若くてバイタリティあふれる教員に出会うことがしばしばある。表 1 は、「学校教員統計調査（文部科学省：平成 28 年）」の公立小学校における本務教員の年齢構成データであるが、学校現場で中堅、ベテランと呼ばれるのが、1990 年代半ばから 2000 年代初めにかけて採用された教員（右表 38 歳から 46 歳くらい）であると想定するならば、彼らが初任の頃には、身近なところに適切なアドバイスをしてくれる中堅、ベテラン教員（右表 51 歳から 58 歳くらい）が多くおり、日常的にアドバイスを受けて、授業を見せてもらったりしながら少しずつ授業づくりについて学ぶことができた。しかし、昨今は、表からもわかるように、中堅教員となる 40 台前後の教員が少なく、学校現場ではその世代より 10 年近くキャリアの浅い、いわば「新・中堅世代」がアドバイスを求められる立場になることも多い。ついこの前までは、自身も「授業づくりは何

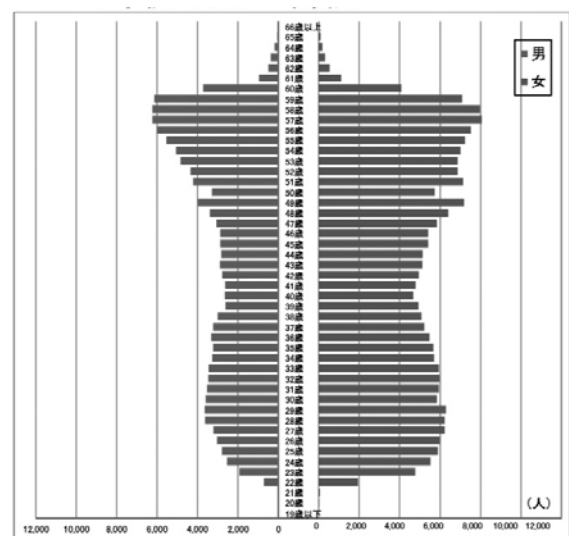


表 1 学校教員統計調査
(公立小学校における本務教員年齢構成：H28)

から手を付ければいいのだろう・・・」と思っていた世代が、数年後にはアドバイスを求められる立場になるのである。本研究では、新卒3年目で初めて校内代表研究授業に挑戦した若年教員の授業づくりへの関わりを通して、学年主任教員や教職大学院の学校改善マネジメントコースで学ぶ同校籍の現職院生が授業者にどうかかわり、その過程を通して、それぞれの立場でどのような学びを得ていったのかを検証していきたい。

2. チームとしての授業づくり

本研究で取り上げる実践は、新規採用から3年目を迎える和歌山市立四箇郷小学校の6年担任小原佑真教諭による教科書教材「森へ」を扱った学習単元である。同校は、3年前、和歌山市で初めて学校図書館司書が配置された学校で、当時の学校長湯川泰成先生からの依頼を受け、和歌山大学との地域連携事業の一環として学校図書館を活用した国語科の授業づくりについて研究を進めてきた。その1年目、2年目に中心となって授業づくりに取り組んだ米田優介教諭が今年度、本学教職大学院へ派遣され学校改善マネジメントコースで学んでいる。また小原教諭と共に6年生を担当する学年主任の玉置大己教諭は新規採用から6年目。「はじめに」で触れた「新・中堅世代」に当たる教員である。さらに、2年間、学校図書館で児童と学級担任と図書をつなぐ役割を果たしてくれた学校図書館司書の岡恵子教諭が配置替えとなり、活性化が促進された学校図書館の維持継続と積極的な活用が各学級担任に課せられる状況となっていた。そんな中、若い小原佑真教諭が単元づくりに挑戦することになったため、須佐、米田、玉置がチームとなって小原教諭の単元づくりをサポートすることになった。

3. 単元づくりへの挑戦（若年教員の立場から）

本研究に関わることになったきっかけは、玉置主任の「やってみるか。」という一言であった。新卒から2年、様々な授業に自分なりに取り組んでいたつもりであった。しかし、必死に考えた授業が上手くいかないことも多く、悩んでいた私にその一言は大きかった。これを機に自分の授業をより良いものにできるのではないか、そういった期待が高まった。もちろん本当にできるのだろうか、自分がやらせてもらっているのだろうかという不安もあった。しかし、何事も挑戦だという思いのもと、やることを決めた。

単元づくりを始めると、すぐに壁にぶつかった。それはどの教材で単元づくりを行うかという問題である。「物語文は面白いな。」「説明文は自分自身、苦手意識があるが、せつかくの機会だからやってみようか

な。」「でもやっぱり物語文もいいな。」などと、なかなか教材を決められなかった。また、周りの先生方に相談すると、「自分がやりたいことをやるといいよ。」と言われたのだが、そもそもやりたいことが見つからないといった状態であった。そんなとき、玉置主任がなにげなく、「好きなことをからめては」とアドバイスを下さった。私は元々本を読むのが好きだったため、本の面白さを子どもたちに伝えることができたらいいなと感じた。そこで今回の単元づくりでは、光村図書の6年生用国語教科書「創造」より、「本は友達」の「私と本」、「森へ」を教材とすることに決めた。

教材が決まり、単元を作る上で、子どもたちが楽しみながら学習に取り組めるような単元を作りたいと考えていた。しかし、教材研究を行っていく中で、いくつもの課題にぶつかった。まずぶつかったのが、授業のアイデア、単元のアイデアが浮かばないという課題であった。単元を作った経験や、他の先生方の授業を見せていただいた経験がまだまだ乏しく、単元のゴールに子どもたちのどういった姿を設定すればいいのか、そのゴールに向けてどのような授業の過程が必要なのかなど、考えても思いつかなかった。また、思いついても、あまり面白そうと感じられない単元構成ばかりであった。どうすればよいか分からなくなっていった時、市民図書館を訪れた。これは、本単元を行うにあたり、市民図書館の協力をあおぎ、連携を取りながら授業を行いたいと考えたためである。そこで、本を紹介するポップや、一人の著者の本を集めたコーナー、あまり借りられていない本ばかりを集めたコーナーを目にした。そこから、こういった工夫が子どもたちの読書意欲を高めるのだと感じ、そうした工夫にもっと触れるため、様々な本屋さんや図書館を訪れ、本を専門に扱う方々の本の見せ方に触れた。授業を考える際、ただ学校で教材と向き合うだけでなく、実際にそれを専門に扱っている方のやり方に触れるということの大切さを感じた。

こうした過程を経て、単元のゴールを6年生が本を全校の児童に紹介するという活動に設定した。しかし、そこからも課題はあった。それは単元計画を上手く組めなかったことである。本を紹介するというゴールに向けてどういった学習をしていく必要があるのか、そのためにどういった力を毎時身につけていけばいいのか上手く考えられなかった。また、単元が第一次、第二次で途切れ途切れになっているというアドバイスを何度も受けた。そんなとき、大切にしたいのが子どもの思考の流れを考えることであった。実際に子どもの気持ち、立場に立って思考の流れを考えてみた。言葉では簡単だが、実際に想像して考えるのは難しかった。しかし、子どもの立場に立って考えるようになって、自分の考えた単元の課題がそれまでよりも見えてくるようになった。

また、全校の子どもに本を紹介するという単元のゴールにも課題はあった。それは低学年に向けた本の紹介というものをどのように行えばよいのか、自分自身、明確に分かっていなかったことである。そのため、子どもたちがどのようなものを目標にすればよいのかも、想像できていなかった。そこで、モデルとなる紹介文を書いてみて、低学年を担当している先生方に見てもらった。その中で、低学年の子どもは自分が思っている以上に長い文章を読むのが難しいことや、文章よりも絵などが大切だということなどを教えていただいた。

がんばろうと思って始めた単元づくりは一人では解決できず、どうしてよいか一人で考えても分からない課題ばかりであった。しかし、まわりの先生方に相談し、教えていただくことで一つ一つ課題を解決することが出来た。今回、改めて先輩方を頼ること、先輩方に相談することの大切さを感じた。(小原)

4. 単元づくりに関わって(「新・中堅世代」の立場から)

これまでに自分は子どもが「やりたい」「やってみよう」「おもしろそう」と思えるような単元を作ろうと意識して単元づくりに挑戦してきた。また、単元の中の学習活動が、子どもたちにとって必要であるかどうかを考え、学習を進めていけるようにしてきた。そこで今回、小原教諭が単元づくりをしていく中でも子どもの活動をイメージしながら単元や授業を作っているような助言やサポートをしていこうと思った。

しかし実際に単元づくりに関わってみて、自分以外の人の単元づくりに関わることがこれほど難しいのかと痛感させられた。

まず、小原教諭自身が「何をしたいのか」、「どんな単元を子どもたちと展開していきたいのか」が見えておらず、単元づくりについて須佐准教授や米田教諭たちと協議していてもピンときていない様子であった。そこからは、単元案を作っては捨て、作っては捨てるを繰り返す日々であった。そんな中で、この6年生の児童を昨年度担任したときにおこなった学校図書をプレゼンするという単元の続編のような形で学校図書館を活性化させるような活動を行う単元について提案を試みた。小原教諭自身も、読書指導と関連付けた学習への思い入れがあり、そこでやっと単元づくりの方向性が定まった。単元の方向性が決まると、何をすべきかが見え、それに向けて毎日準備をしたり、教材研究をしたりする日々が続いた。教室だけの学習ではなく、子どもたちの図書への関心が高まるような仕掛けをたくさん用意していった。

単元づくりをサポートする中で、難しさを感じたのは、いつもは自分の単元を自分の思いを中心に組んできたので、いざ自分以外の先生の授業となると、どこまで口を出していいのかということであった。その結

果、最初は小原教諭の経験のためと思い、「自分で考え、単元を作ってみよう。」と励まし、見守ることに重点を置いていたが、助言やアドバイスを初期段階でもう少ししていれば、教材研究にあてる時間を増やすことができたのだろうと今は思っている。また、小原教諭が悩みながら自力で単元を組んでいる様子を目の当たりにし、単元を組んでいくには、やはりある程度の知識や経験が必要なのだと改めて実感させられた。

今回小原教諭の単元づくりに関わってみて、若手教員の単元づくりに関わる時は、もっとサポートしながら、共に学んでいくような姿勢が必要であると痛感した。(玉置)

5. 授業実践の実例

《単元名》

読んでみて、四箇郷の子！

『わたしたちからのおすすめ本』

～紹介文でわきおこせ、みんなの「読んでみたい！！」～

《学習指導目標》

○本や文章を読んで考えたことを紹介文に書き表し、それを交流することで自分の考えを広げたり深めたりすることができる。(読むこと(1)オ)

○表現の効果などについて確かめ、この本「読んでみたい」と思えるような文章を工夫して書くことができる。(書くこと(1)オ)

《評価規準》

○関心・意欲・態度

本を学校みんなに広めることに興味を持っている。

○読む

本や文章を読んで考えたことを紹介文に書き表し、それを交流することで自分の考えを広げ、深めている。

○書く

表現の効果などについて確かめ、この本「読んでみたい」と思えるような文章を工夫して書いている。

○言語についての知識・理解・技能

語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心を持っている。

《単元の概要》

四箇郷小学校の学校図書館は、一昨年度から和歌山市で唯一配置された学校図書館司書の岡教諭の尽力で活性化されており、学校全体の読書意欲が高まっていた。しかし、本年度は学校図書館司書の配置換えがあった。そこで、本単元では、6年生の学習を通して学校全体の読書意欲を高めたいと考えた。

本学級の子どもたちは、本を読むことが好きな子が多い。読書タイムには静かに席について本を読んでいる。しかし、子どもによって読む本のジャンルが決まっていることが、単元のはじめにおこなった読書ア

ンケートから分かった。本教材は「本は友達」という単元となっている。「私と本」では、自分と本との関わりについて考え、一番心に残っている本について紹介するという活動が設定されている。その中で紀行文「森へ」が掲載されている。「森へ」は、擬音語や臨場感のある写真などから、情景を頭に思い浮かべながら読める作品となっている。ところが多くの子どもたちは、このような本を読んだことがないということがアンケートより分かった。本単元が、そうした今までに読んだことのないような本を読んでもみるきっかけとなり、子どもたちの読書の幅が広がればと考えた。

そこで、本単元では、6年生からのおすすめ本コーナーを設けることで、学校中の読書意欲を高めることを目指すことにした。また、その過程において6年生には相手の学年に合わせて本の紹介文を書き、相手の「読んでみたい」という気持ちを高める文章の書き方について学ばせたいと考えた。

第一次では、はじめにアンケート調査を実施することにした。そのアンケートの結果を示し、自分たちの読書について知るとともに、「どのようなときに本を読みたくなるか」という質問への回答をもとに、人に紹介してもらふこと、表紙が見えること、などが読書意欲につながっていることに気付かせた。つぎに自分の読書経験をふり返らせた。自分がどのようにして本を選んで読んできたのか、自分の読書にどのような傾向があるのかなど気づかせたいと考えたからである。また、学校図書館の本棚に残されている代本板の場所を調べ、各学年の子どもたちがどのようなジャンルの本を読んでいるのかを知るとともに、自分が普段あまり読まない本にも興味・関心を持てるようにした。その上で、市民図書館の見学に行くことにした。さまざまな本を知り読書意欲を高めるとともに、本を読みたくなるような工夫について知り、学校中に自分たちのおすすめの本を紹介することにも意欲を持つことができると考えたからだ。また、前年度まで学校図書館司書として尽力されていた岡教諭より、図書館を運営する上での取り組みや工夫について聞く機会を設けることにした。それらの活動を通して、どうすれば学校中に本を「読んでみたい」と思ってもらえるか、そのために学校図書館をどうしていけばよいか話し合い、学校中の子どもたちや先生に本を紹介するという単元のゴールへの見通しを持てるようにした。

第二次では、低学年、中学年、高学年、大人の4通りの相手に合わせて紹介文を書いた。題材は、親しみがあり、内容を共有しやすい国語科教材を用いた。この活動で、相手に合わせて書くとはどういうことなのかを学ばせようと考えた。次にその紹介文をグループで読み合い、「読んでみたい」と思わせる紹介文について話し合った。話し合いは①同じ相手に書いたグループでの話し合い、②違う相手に書いたグループで

の話し合いという2種類のグループでおこなった。これにより、同じ相手に書いた子同士での話し合いに加えて、違う相手に書いた子の客観的な意見を得ることができ、より「読んでみたい」を高める紹介文について深く考えられると思ったからである。そして話し合ったことをもとに、紹介文を仕上げさせた。紹介文はろうかに並べ、いろいろな紹介文が読めるようにした。それにより、どのような工夫ができるか共有した上で次の活動につなげた。

第三次では、第二次の活動を通して思ったことや気づいたことをもとに、もう一度「読んでみたい」を高める紹介文に必要なことを考えさせた。その上で自分が学校中に紹介したい本について紹介文を書かせた。本選びの視点は、「自分の心に残っている本」、「あまり読まれていないから読んでほしい本」など一人ひとり異なる。よって、紹介文を書いたのち、話し合い活動をおこなった。活動は第二次と同じだが、今回は選んだ本が一人ひとり違う。そのため、より客観的な視点で紹介文を読み、自分が読みたくなったかという視点もふまえて意見を話すことができる。この活動を通して「読んでみたい」と思わせる紹介文について考えた上で、紹介文を仕上げた。また、自分たちが紹介する本に関係した掲示を作り、本の表紙とともにおすすめ本コーナーを作った。それを期間限定で設置し、「読んでみたい」を高める『読書ストリート』を作った。これにより、学校中に6年生からのおすすめ本を発信した。また、学校図書館に感想カードを用意し、紹介文や本を読んだ児童が感想を書けるようにした。他の児童から反応が返ってくることで、紹介文を書いた児童らは、より本単元の活動に意味を持てると考えた。単元の終末では、2学期、3学期の学校図書館をどのようにしていくか話し合い、本単元だけでなく、年間を通して学校図書館をよくしていくことに意欲を持てるようにした。

《第二次で用意した国語科教材》

〈低学年に向けて紹介する教材〉

- ・たぬきの糸車・ずうっと、ずっと、だいすきだよ
- ・じどうしゃくらべ・どうぶつの赤ちゃん

〈中学年に向けて紹介する教材〉

- ・ちいちゃんのかげおくり・三年とうげ
- ・すがたを変える大豆・ありの行列

〈高学年に向けて紹介する教材〉

- ・大造じいさんとガン・わらぐつの中の神様
- ・千年の釘にいどむ・百年後のふるさとを守る

〈大人に向けて紹介する教材〉

- ・ずうっと、ずっと、だいすきだよ・三年とうげ
- ・ちいちゃんのかげおくり・大造じいさんとガン

《単元計画》

全 20 時間

		総合的な学習の時間	
	読むこと	書くこと	
第 1 次 「知ろう」(六時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・読書に関するアンケートから、単元に意欲を持つ。(2時間) ・「森へ」を読み、紀行文と出会う。(1時間) ・自分の読書経験をふり返る。(1時間) 		<ul style="list-style-type: none"> ・市民図書館に見学に行く。 ・前年度の学校図書館司書がおこなっていた取り組みを知る。 ・代本板より他学年の読書状況を調査する。
第 2 次 「読んでみたい」について考えよう(七時間)		<ul style="list-style-type: none"> ・低・中・高・大人の中から相手を決め、4種類の教材から1つ紹介文を書く。(3時間) ・同じ相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(1時間) ・違う相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(2時間) ・話し合ったことをもとに、紹介文を仕上げる。(1時間) 	☆総合的な学習のねらい <ul style="list-style-type: none"> ・本に興味を持つ。 ・本を読んでもらうためにどのような工夫がされているか知る。
第 3 次 『読書ストリート』でおすすめ、この本おもしろいよ(七時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・二学期・三学期に学校図書館をどのようにしていくか話し合う。(1時間) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次の紹介文をもとに、「読んでみたい」と思わせる紹介文について考える。(1時間) ・紹介文を書く相手と本を決め、紹介文を書く。(2時間) ・違う相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(2時間) ・添削する。(1/2) ・話し合い、紹介文を改善する。(2/2 本時) ・話し合ったことをもとに、紹介文を仕上げる。(1時間) 	<ul style="list-style-type: none"> ・おすすめ本のコーナーを作る。

図書室につながるろうかに6年生のおすすめ本コーナーを並べ、「読書ストリート」にする。

《本時の学習について》

○本時の目標

紹介文について話し合うことを通して、より一層本を「読んでみたい」と思わせる紹介文を考える。

《本時の展開》

学習活動	教師の支援★と評価☆
1、本時のめあてを確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> もっと本が読みたくなる紹介文を考えよう。 </div>	
2、よりよい紹介文を書くためのポイントを確認する。	★前時までの学習から、話し合いの視点を確認する。
3、違う相手に書いたグループで、紹介文について話し合う。	★話し合いで気づいたことや助言してもらったことをメモするよう指導する。
4、全体でよりよい紹介文について考える。	★上の話し合いを受けて気づいたことや助言してもらったことを中心に話し合う。 ・問いかけの工夫 ・内容の工夫 ・感想の工夫 ・おすすめする言葉の工夫
5、「読んでみたい」を高められるよう、自分の紹介文を考え直す。	★話し合いで考えたことをもとに、自分の紹介文を書き直すよう指導する。 ☆話し合いを通して、「読んでみたい」を高める紹介文について考えることができています。
6、ふりかえりをする。	★どのようなことを考えて、紹介文を見直したかふり返る。 ☆理由を持って紹介文を考え直すことができています。

6. 授業実践を振り返って（若年教員の立場から）

本単元づくりを通して単元の構成や活動の進め方について多くの先生方から教えていただいた。例えば、単元を組む際には、本屋や図書館など、自分が作ろうとしている単元に関する専門家に接することやそのやり方に触れること、実際に自分の目で見て、自分でやってみるということが大切だということである。もし、図書館や本屋に行ったり、実際に紹介カードを作ったりしていなければ、子どもたちが何を目指せばいいのか、どんなゴールを見据えればいいのかはわからなかっただろう。

また、単元づくりの過程で教えていただいた「単元計画は、プランではなくプロジェクトだ」という言葉が私の胸に強く響いた。単元全体の活動の流れが通るように、毎時の授業に意味があるように作ることができたと感じても、それはあくまで予定に過ぎず、実際にやっていく中で適宜修正を加えることが必要だと本単元の学習を進める中で強く感じた。これまでの自分は、単元を作ってしまうと、あとはそれを行っていくだけであったため、今回修正を加えながら単元を進めていくことの大切さを感じた。

しかし、本単元づくりを通じて、今後自分が克服していかなければならない課題も見えてきた。

一つ目は、様々な授業を知ることである。色々な先生方の授業を見させていただいたり、授業について他の先生方に相談したりすることで、様々な授業のアイデアや方法を学んでいく必要があると感じた。

二つ目は、もっと単元全体を見据えながら授業を作ることである。この点については、今回の単元づくりにおいても、何度も教えていただいた。単元全体の見通しを持って、毎時間毎時間を考えていくということが、私はまだまだできていない。

三つ目は子どもの視点に立って単元を考えることである。この点も今回かなり意識したつもりではあったが、子どもたちの意欲・関心の高い学習活動であったこととは別に、子どもたちの知識としての定着不足についての指摘や思考の促し方や可視化等についての指導をいただいた。

もちろん他にも課題はたくさんあるが、今回の研究で見えてきた、この三点の課題について考えながら単元を作っていくことで、今後よりよい単元づくりをしていければと考える。最後に本研究に際し、たくさんの助言をいただいた須佐准教授、米田教諭、玉置主任、ならびに四箇郷小学校の先生方に深く感謝の意を伝えたい。(小原)

7. 「学校改善マネジメント」の立場から

平成28年度からの四箇郷小学校における国語科は、学校図書館司書の尽力や和歌山大学地域連携推進事業の支援により一気に活性化し、学校図書館を活用した単元づくりの傾向が強くなった。しかし、平成29年度における学校図書館司書の勤務形態は中学校区での兼務(四箇郷小学校へは週2日)、平成30年度は和歌山市内の小学校への転任となった。6年生担任2人もそのことを子どもの図書離れの危機と感じ、この3年間学校図書館司書の存在を肌で感じていた6年生も、「四箇郷の学校図書館をどう維持するか」という取り組みに自然と入っていくことができていたように感じる。

私自身、今年度は和歌山大学教職大学院に在籍し、これまでとは違い、一歩離れたところから学校や各学年の業務や教材研究に関わることができた。また、在学することで、これまで3年に渡り本校の国語科教材研究に指導や助言を頂いていた須佐准教授との連携がよりスムーズに、より密なものになった。そのメリットを活かし、須佐准教授からのヒントを各学年と共に考えたり悩んだりする機会をいただくことができた。6月の小原実践は、自身もそうであったように、採用3年目の教員が単元を構成することがこれほど根気の要るものであり、苦心するものであると感じさせられた。小原教諭の授業に対する思いは強く、「これまでの四箇郷小学校の取り組みの流れに沿うも

のにしたい」ということが感じられたが、いくつかの壁があったように感じる。一つは教材解釈の壁である。よく見る文学教材や説明的文章教材ではなく、これまでの自分の読書経験をふり返る単元「本は友達」を選択したことで、本校における先行的な事例も見られず、教科書教材を理解し、それを学校の取組とどう結びつければ良いのかという点に大きな悩みや難しさがあった。また、小原教諭は当初から子ども達に書く力をつけさせたいという思いも持っていた。そのため、「教材の魅力・学校の取組・つけたい力」これら3つの狭間で揺れ、方向性を定めることができない姿があった。二つ目は学年主任の期待という壁である。学年主任玉置教諭(研究主任)には、「この機会に小原教諭が独自で単元計画を立てられる力をつけてほしい」との思いが感じられた。須佐准教授と共に教材づくりをすれば確実に力がつくという自身の経験からくる確信があったからである。できる限りの単元構成を小原教諭に考えさせることで自分のものにしてほしいという思いがあった。小原教諭は、期待に応えなければという思いと、うまく進まない焦りがあり、玉置教諭のその思いがプレッシャーになってしまう時期も見られた。

一方で玉置教諭には、どこまでアドバイスをすべきかという迷いがあった。できる限り小原教諭にやらせてみたいという思いから、「自分だったらこうする。こうしたい。」というものは持ちつつも、小原教諭の教材解釈や単元構成に寄り添いながら適宜指導や支援を行っていた。なかなかうまくまとまらない様子を察し、具体的な提案やアドバイスをすべきか悩んでいた様子もあったが、須佐准教授からの助言を活かして、ある程度単元構成がまとまってきた時期からは、玉置教諭も積極的に単元構成の補正を行いやすくなった。学年主任の一方的なものではなく、小原教諭の思いを尊重しながらより良い選択を共に考えていくという学年での話し合いの様子がうかがえた。

比較的若い教員同士が共に単元を作っていくということは、これまでの「ベテラン主任と若手教員」という学年構成の時に見られたようなベテラン主任の経験によるアドバイスというものが得にくいということがある。しかし若手教員が増加する現在の状況においては、国語科だけでなくどの教科においても、自分たちでより良いものを作っていかなければならない場面が少なからずあることは確かである。そんな時にどう打開していくかということは現在の学校現場全体で乗り越えていかなければならない課題である。この単元を実践するにあたり、4月から須佐准教授との単元についての相談が行われた。小原教諭と玉置教諭は何度も和歌山大学へ足を運び須佐准教授の助言を受けた。時には四箇郷小学校へ来て頂き、何度も回を重ねるたびに一つの単元を形にしていくことができた。この二人三脚で作っていった単元の中で、小原教諭、玉置教諭、

そして自分自身と三者三様の学びがあった。四箇郷小学校としても、「単元づくりは難しいものである。だからこそやりがいがある。」というような風潮になってきていることも確かである。この、「単元を複数人で構成し吟味していく、分からないことがあればすぐに相談ができる」というような、「学級から学年へ、学年から学校へ、学校から校外へ」という組織としての実践を今後も続けていきたい。(米田)

8. 四箇郷小学校における授業づくりの成果と今後の展望について

和歌山市には、現在義務教育学校を含め51の小学校がある。そのうち22校が教科や領域ごとに教育委員会の研究指定を受け、公開研究授業研修会を行っている。四箇郷小学校は、そういった研究指定を受けているわけではないが、国語科の授業研究を現職教育の中心に据え、数年前からは全員が校内で研究授業を実施し、互いの授業実践を積極的に公開して学び合うような職員集団になっている。そんな中で米田教諭による「すがたをかえる大豆」や「平和のとりでを築く」を扱った複合単元実践も行われてきた。米田教諭によるそれらの授業実践では、いずれも児童が主体的に学習へと向かうための工夫がみられ、児童が生き生きと活動する姿を見ることができた。そんな授業実践に触れてきたことによって、同校の実践経験の浅い先生方を中心に「自分もあんな授業をしてみたい。」という思いが芽生えていることを感じていた。そんな中で、今年度、小原教諭が初めて自分で単元づくりの最初から挑戦するということになり、私も関わらせていただくことになった。小原先生にとっては、大変負荷のかかる挑戦になったかもしれないが、小原先生は今回の授業実践を通して見えてきた自分自身の課題として、一、様々な授業のアイデアや方法を学んでいく必要があること

二、単元全体を見据えながら授業を作ること

三、子どもの視点に立って単元を考えること

の3つを挙げており、小原先生にとって実りの多い実践になったことがうかがえる。

一方で、その挑戦を支える私たちサポートスタッフの在り方についても課題がはっきりしたといえる。今回、学年主任として小原教諭を支え、励まし、自らもその姿に学ぼうとしていた玉置教諭は、これまで米田教諭の単元づくりに接しながら、自身が学んできたことを小原教諭に体感させることで、成長を促し、学ばせようとしていることが印象的であった。しかしなが

ら、玉置教諭が述懐しているように、サポートの在り方が適切であったかは考えなければならない。例えば、米田教諭の単元づくりの場合、私が質問に答えると米田教諭はそれを一旦自分自身の中に取り込み、さらにそこに自分なりの考えを練りこみ、自身のものとして納得、消化した上で、児童におろすことが出来ていた。玉置教諭が単元づくりに挑戦した時も米田教諭の実践から学んだことを自分なりに整理し、ある程度の単元構想を持って質問し、思考を重ねて実践することができていた。しかし、今回単元づくりに挑戦した小原教諭の場合、昨年、一昨年と米田教諭や玉置教諭が単元づくりに取り組んだ時とはあきらかにキャリアが違う。よって、当然、必要なサポートも違ってくる。

小原教諭が奮闘しつつも、うまく単元の構想を描けないで悩んでいる様子を見ながら、精神的な重圧に耐えられるだろうかと心配もした。結局、小原教諭は、自身の強い意志により、難局を乗り越えて単元を構想し、実践することができた。しかし、一方で、私も含め、サポートメンバーはもう少し適切な支援をするべきだったと反省している。

私はこの3年間、教職大学院で初任者の指導にも関わらせていただいていた。小・中学校合わせて30人の初任者と関わってきたが、中でも毎週参観してきた6名の初任者の様子から学ばせてもらったことは多い。6名の初任者はいずれも前向きに指導を受け止め、努力しようとする教員であった。しかし、その学び方や伸び方は様々であり、年齢やキャリアによるところだけでなく、個によって、多種多様なのである。

四箇郷小学校に限らず、小学校現場には小原教諭世代の教員が複数名在籍している。「若い先生にはこんな方法で・・・」では、きつとうまくいかず、「二度とこんなしんどいことはしたくない。」という事態を招きかねない。そうなってしまつては、元の木阿弥である。個に応じた支援が、授業づくりの場面においても必要なのである。

今回の単元づくりの営みに学び、学校現場で新たな授業実践に挑戦しようとする若い先生方の授業実践力の向上に寄与することができるよう、「個に寄り添う授業づくり支援の在り方」を考えていきたいと思う。(須佐)

参考資料

国語教科書 6年(光村図書)

学習指導要領解説 国語編(文部科学省)

学校教員統計調査(確定値)文部科学省(平成28年)